

# === T A C S 情報 第 8 号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和 6 年 7 月 16 日

農業技術課 広域普及指導センター

## 1 気象経過

### (1) 気温

5月の平均気温は、17.9℃（対平年差+0.4℃）と平年並であった。

6月の平均気温は、23.2℃（同+1.8℃）と平年に比べかなり高かった。

7月1～3半旬の平均気温は、26.5℃（同+2.1℃）と平年に比べかなり高かった。

### (2) 降水量

5月の降水量は、228.5mm（対平年比 186%）と平年に比べ多かった。

6月の降水量は、150.0mm（同 87%）と平年並であった。

7月1～3半旬の降水量は、132.5mm（同 90%）と平年並であった。

### (3) 全天日射量

5月の平均全天日射量は、18.0MJ/m<sup>2</sup>/日（対平年比 98%）と平年並であった。

6月の平均全天日射量は、20.3MJ/m<sup>2</sup>/日（同 117%）と平年に比べかなり多かった。

7月1～3半旬の平均全天日射量は、15.4MJ/m<sup>2</sup>/日（同 100%）と平年並であった。

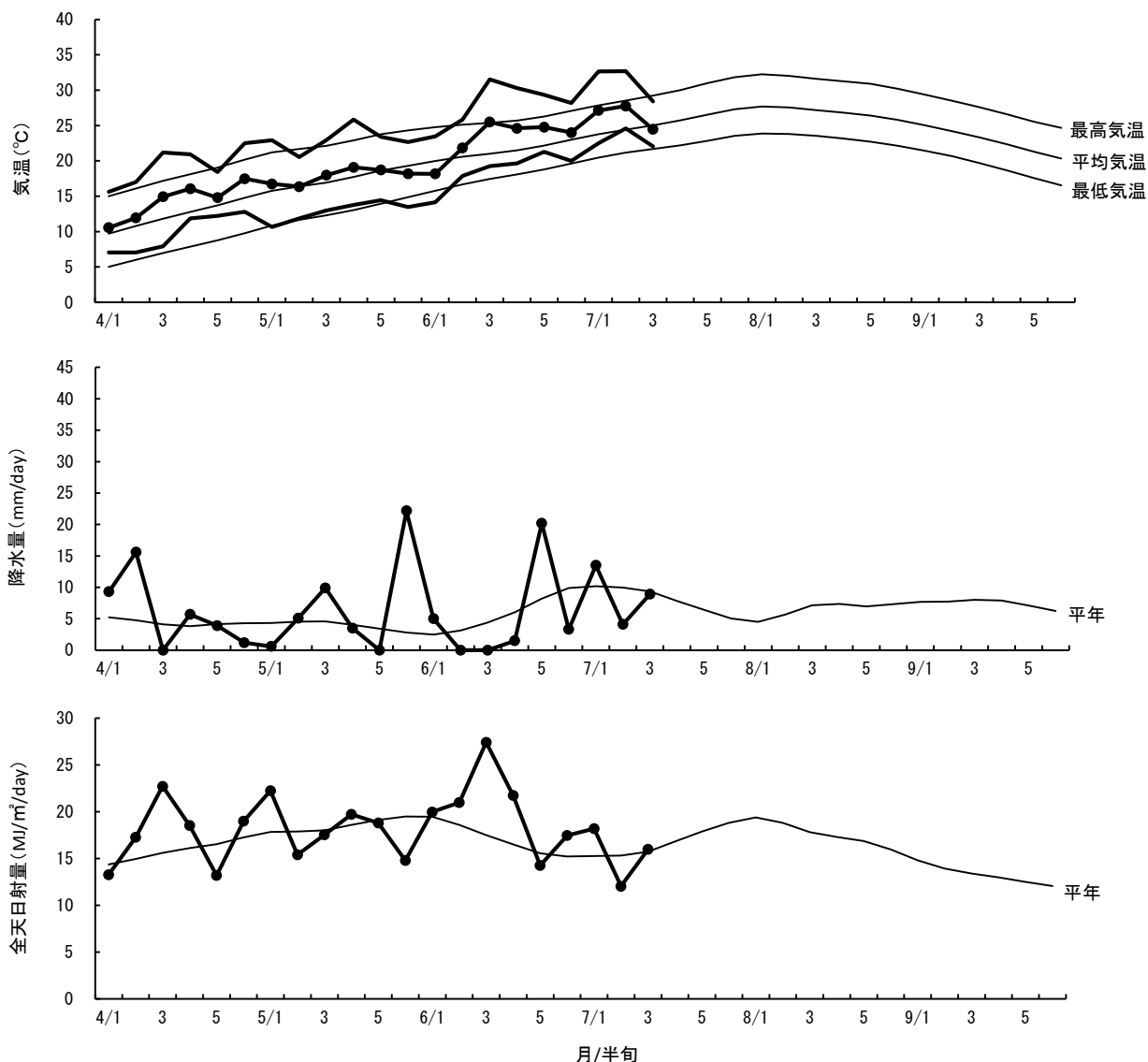


図 1 令和 6 年の気象経過（富山地方気象台）

## 2 生育状況（生育観測ほデータ）

### (1) コシヒカリ

平年に比べ、草丈、茎数、葉色は並、葉齢は0.3葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、茎数は並、葉色は並となっている。

幼穂形成期は、平年に比べ1日早い7月10日となった。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年に比べ1日早い7月31日頃と見込まれる。

表1 「コシヒカリ」の生育状況（7月16日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R6	5月14日	82.1	21.7	462	13.1	4.0	32.4	7月10日	(7月31日)
R5	5月13日	80.1	20.8	450	12.9	4.0	31.4	7月10日	7月30日
平年	5月14日	79.8	22.2	482	12.8	4.0	33.3	7月11日	8月1日
前年比・差	1	102	104	103	0.2	0.0	1.0	0	(1)
平年比・差	0	103	98	96	0.3	0.0	-0.9	-1	(-1)

注1) 平年 : H26~R5の平均

注2) 本年の出穂期は予測値

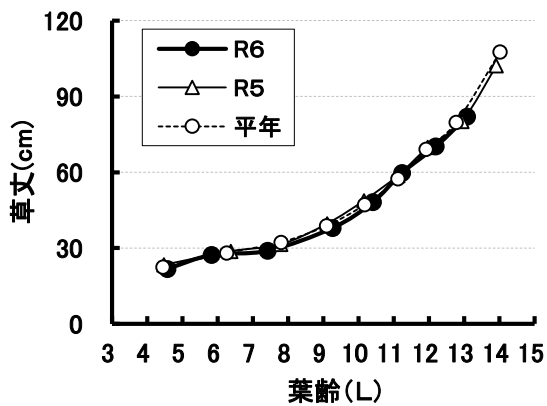


図2 草丈の推移（生観コシヒカリ）

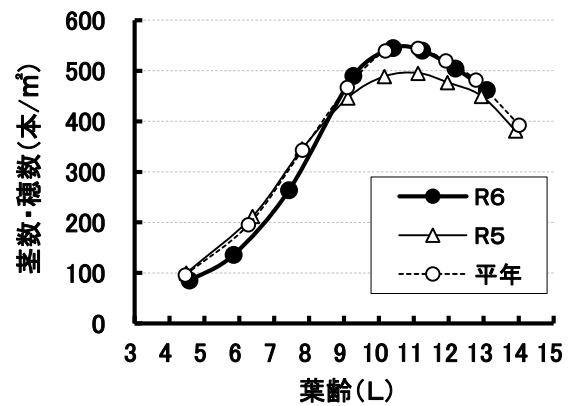


図3 茎数の推移（生観コシヒカリ）

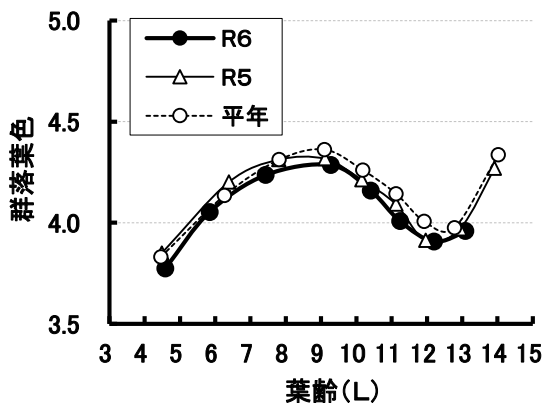


図4 葉色の推移（生観コシヒカリ）

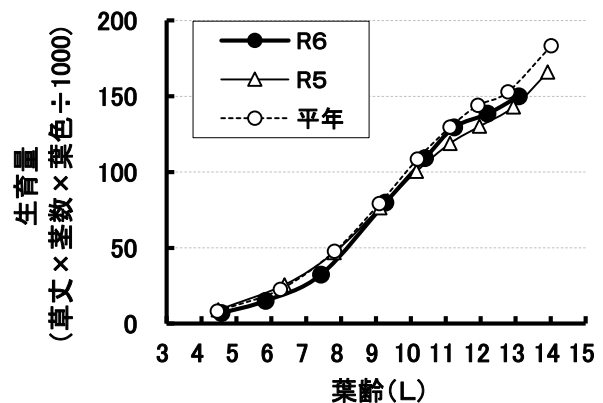


図5 生育量の推移（生観コシヒカリ）

## (2) てんこもり

平年に比べ、草丈はやや長く、茎数、葉色は並、葉齢は0.5葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、葉色は並、茎数はやや多くなっている。

幼穂形成期は、平年に比べ2日早い7月10日となった。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年に比べ2日早い8月1日頃と見込まれる。

表2 「てんこもり」の生育状況（7月16日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD		
R6	5月8日	76.3	31.0	587	14.4	4.1	35.0	7月10日	(8月1日)
R5	5月10日	71.1	29.8	578	13.7	4.1	33.8	7月13日	8月2日
平年	5月8日	71.3	30.7	583	13.9	4.2	35.3	7月12日	8月3日
前年比・差	-2	107	104	102	0.7	0.0	1.2	-3	(-1)
平年比・差	0	107	101	101	0.5	-0.1	-0.3	-2	(-2)

注1) 平年 : H26~R5の平均

注2) 本年の出穂期は予測値

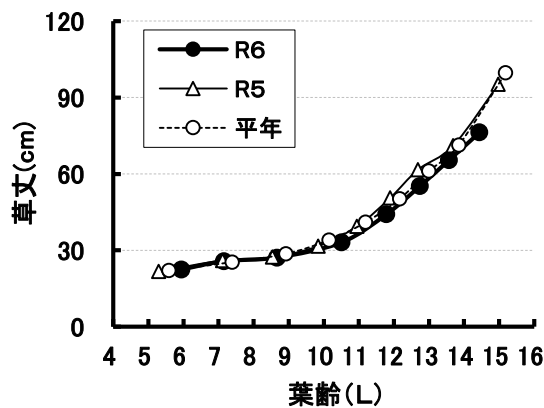


図6 草丈の推移（生観てんこもり）

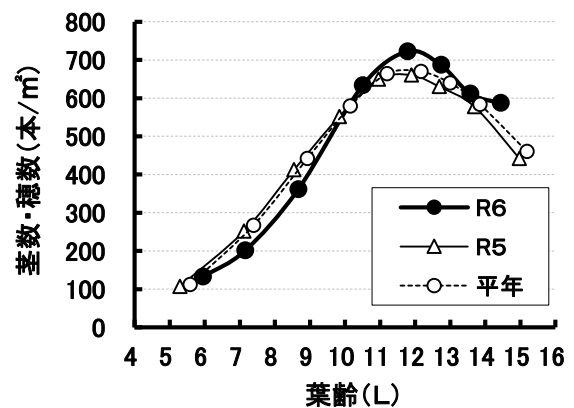


図7 茎数の推移（生観てんこもり）

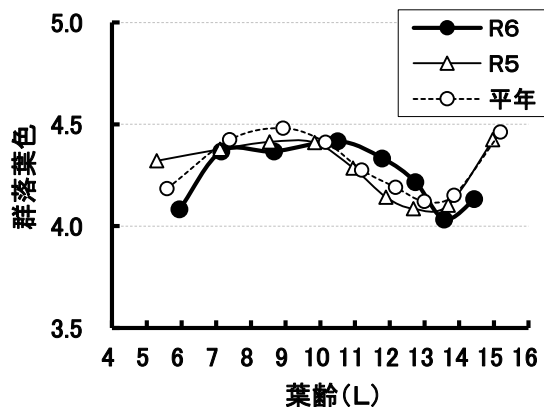


図8 葉色の推移（生観てんこもり）

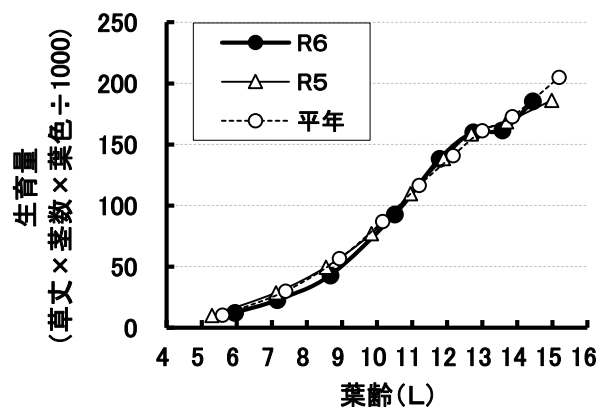


図9 生育量の推移（生観てんこもり）

### 3 当面の技術対策

- ・「コシヒカリ」、「てんこもり」は、飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を徹底し、稲体の活力を維持する。
- ・「コシヒカリ」の肥効調節型基肥栽培では、出穂7日前に必ず葉色診断を行い、淡い場合は追加穂肥を施用する。
- ・出穂後20日間は湛水管理を徹底する。
- ・「てんたかく」の防除は、穂揃期（出穂後3～5日）と傾穂期（穂揃期防除の7日後）に確実に実施する。

#### (1) 「コシヒカリ」の管理

- ・稲体の活力を維持するため、出穂期まで飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。
- ・出穂後20日間は湛水管理を徹底し、刈取りの5～7日前までは間断かん水を行う。
- ・現在、葉色が淡いほ場がみられることから、肥効調節型基肥栽培では、表3を目安に出穂7日前に必ず葉色診断を行い、葉色が淡い場合は出穂3日前までに追加穂肥を施用し、穂揃期の葉色を4.2～4.5（砂壤土は4.5）に誘導する。
- ・分施肥栽培では、穂肥は幼穂形成期の生育量に応じて表4を目安に施用する。

#### <水管理のイメージ>

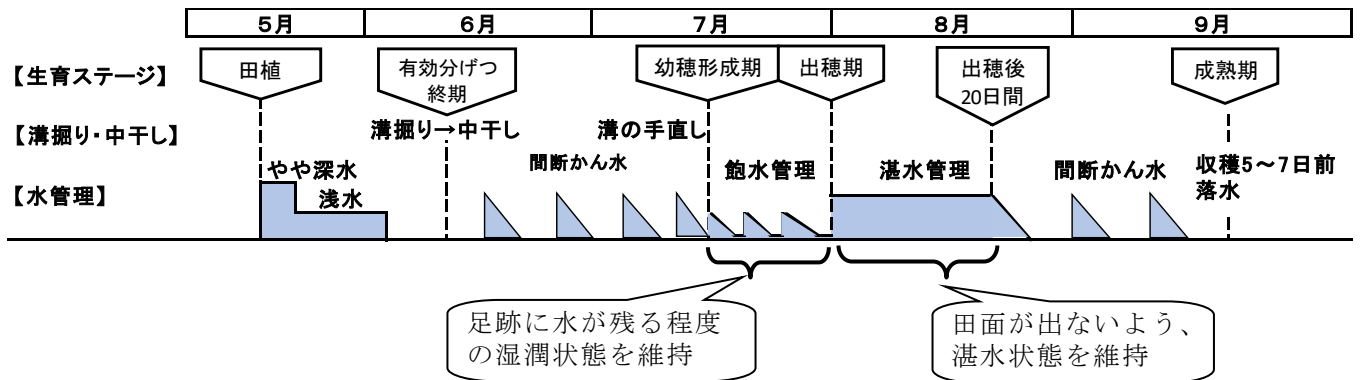


表3 肥効調節型基肥栽培における追加穂肥の目安  
(5月15日頃移植、7月10日幼穂形成期の場合)

出穂7日前頃の葉色診断 (7月24日頃)	追加穂肥の施用 (7月24日～7月28日頃)
4.0以下 (SPAD値32以下)	出穂3～7日前に
※砂壤土は4.2以下 (SPAD値34以下)	窒素成分で0.7～1.0kg/10a
4.0より濃い (SPAD値32より高い)	無し
※砂壤土は4.2より濃い (SPAD値34より高い)	

表4 分施肥栽培における穂肥施用量の目安

幼穂形成期の生育量	1回目穂肥		2回目穂肥	
	時期	窒素施用量 (kg/10a)	時期	窒素施用量 (kg/10a)
適正	幼穂形成期7～9日後	1.5	1回目の7日後	1.5～2.0
やや過剰	幼穂形成期9～11日後	1.0～1.5	1回目の7日後	1.5～2.0
過剰	施用しない	0	出穂の7日前	1.5～2.0

※適正：草丈72cm、茎数470本/m<sup>2</sup>、葉色3.8  
過剰：茎数550本/m<sup>2</sup>以上、葉色4.0以上

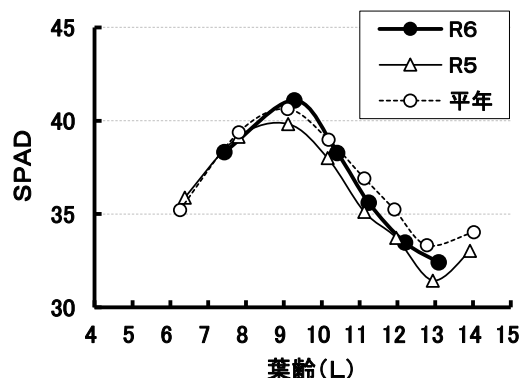


図10 葉色の推移 (生観コシヒカリ)

## (2) 「てんたかく」の管理

- ・5月2日移植の「てんたかく」の出穂期は、近年より1日遅い7月16日と見込まれる。
- ・今後、平年並の気温で推移した場合、成熟期は8月20日頃と見込まれる。
- ・出穂後20日間は湛水管理を徹底する。
- ・刈取りの5～7日前までは、間断かん水を徹底する。

## (3) 「てんこもり」の管理

- ・稲体の活力を維持するため、出穂期まで飽水管理を行う。
- ・出穂後20日間は湛水管理を徹底し、刈取りの5～7日前までは間断かん水を行う。



## (4) 病虫害防除の徹底

### ア 斑点米カメムシ類

7月1日注意報発令

- ・畦畔や雑草地等ではイネ科雑草の穂が出ないように草刈りし、カメムシ類が発生しにくい環境づくりに努める。
- ・早生品種の防除は、粉剤または液剤体系とし、適期を逃さず、穂揃期（出穂3～5日後頃）とその7日後の傾穂期の2回防除を徹底する。
- ・「コシヒカリ」及び「てんこもり」等の中晩生品種は、穂揃期の防除を徹底する。
- ・近隣に雑草地や麦あと不作付地等がある水田では、斑点米カメムシ類の発生が多くなる場合があるので防除を徹底する。
- ・例年発生密度が高い地域や防除後も水田内のすくい取り調査で侵入が認められる場合は、追加防除を行う。

### イ いもち病

- ・本年は7月10日に初発を確認した。
- ・常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生がみられたら直ちに防除する。また、穂いもち防除を確実にを行う。
- ・BLASTAM 情報（葉いもち予測システム）はこちらから    
（農林水産総合技術センター農業研究所HPの研究関連情報に掲載）

### ウ 紋枯病

- ・本年は7月5日に初発を確認した（前年7月5日、平年7月10日）。
- ・前年多発したほ場で箱施薬剤を施用していない場合は、出穂3～4週間前（粒剤）または穂ばらみ期（粉剤、液剤等）の防除を確実にを行う。
- ・本田防除は要防除水準に基づき防除要否を判定し（表5）、適期に薬剤が株元に付着するように散布する。

表5 紋枯病の防除要否判定時期（薬剤散布適期）と要防除水準

品 種	薬剤散布適期 （防除要否判定時期）	要防除水準 （発病株率）
コシヒカリ	出穂10日前頃	15%
てんこもり	出穂7日前頃	(15%) *

※「てんこもり」は基本防除とする。発病株率は追加防除の目安（暫定値）。

## エ 稲こうじ病

- ・常発地や前年に発生が多かったほ場では、出穂の10～15日前（銅剤は出穂の10～20日前）に薬剤防除を行う。

## オ 着色米（斑点米を除く）、ごま葉枯病

- ・稲体活力の低下により発生が助長されることから、適正な施肥、水管理を行う。

農薬散布に際しては、周辺住民への事前の周知と農薬の飛散防止を徹底する。

# 「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

## 1 生育状況（生育観測ほ等データ）

近年に比べ、草丈、葉色は並、茎数はやや多く、葉齢は0.4葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、近年に比べ、草丈、葉色は並、茎数は多くなっている。

幼穂形成期は、近年並の7月13日となった。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は近年並の8月4日頃と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（7月16日 生育観測ほ等）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD		
R6	5月17日	73.2	25.6	561	12.7	4.2	37.7	7月13日	(8月4日)
R5	5月16日	69.5	23.8	517	12.2	4.2	36.0	7月12日	8月2日
近年	5月15日	70.1	24.0	518	12.3	4.2	36.9	7月13日	8月4日
前年比・差	1	105	108	109	0.5	0.0	1.7	1	(2)
近年比・差	2	104	106	108	0.4	0.0	0.8	0	(0)

注1) R6：11ほ場平均（生育観測ほ：4ほ場、新品種実用化・ブラ削減 対照区：7ほ場）

注2) 近年値：H29～R5の平均、本年の出穂期は予測値

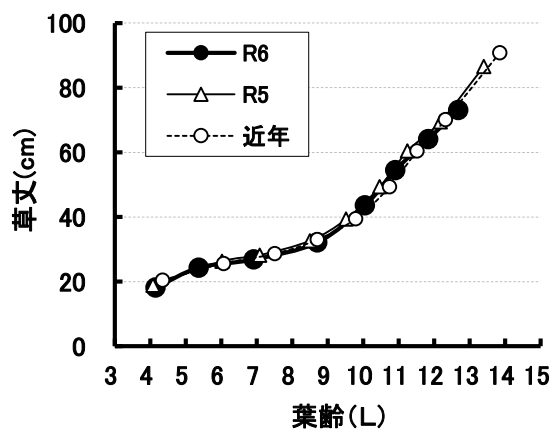


図1 草丈の推移（富富富生育観測ほ等）

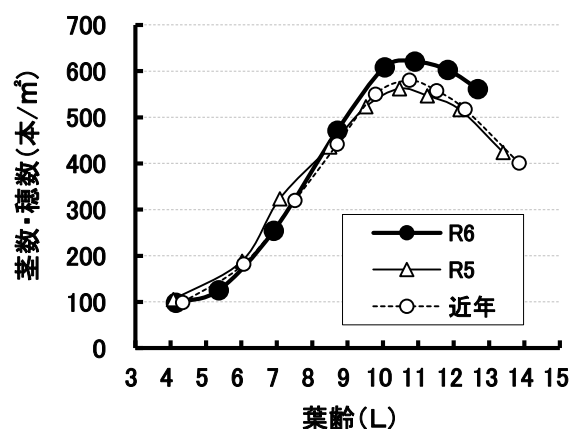


図2 茎数の推移（富富富生育観測ほ等）

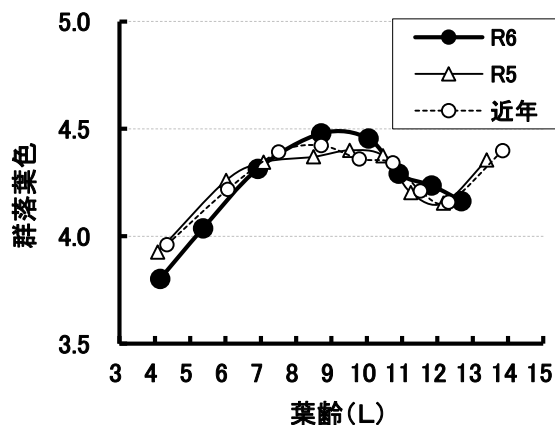


図3 葉色の推移（富富富生育観測ほ等）

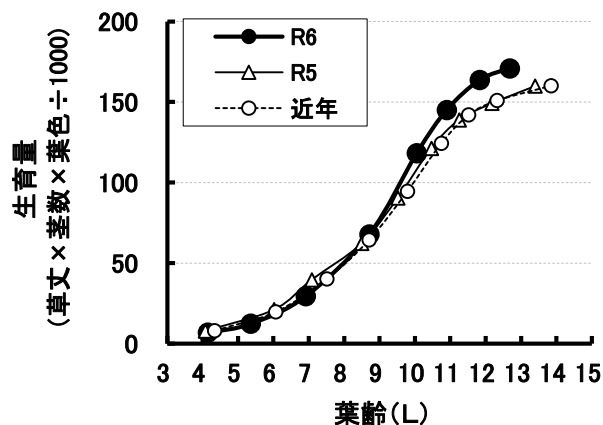


図4 生育量の推移（富富富生育観測ほ等）

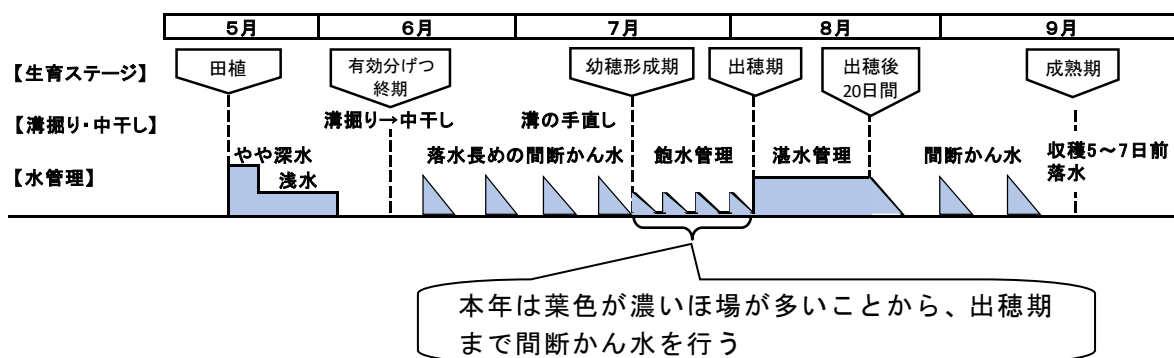
## 2 当面の技術対策

- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため飽水管理を行う。ただし、葉色が濃い場合は、間断かん水を行う。
- ・ 出穂後 20 日間は湛水管理を徹底する。
- ・ 刈取りの 5～7 日前までは、間断かん水を徹底する。

### (1) 水管理

- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため飽水管理を行う。ただし、過剰籾数を防ぐため、葉色が濃い場合は、間断かん水を行う。
- ・ 穂揃期の群落葉色を 4.4 (SPAD 値 35) に誘導する。
- ・ 出穂後 20 日間は湛水管理を徹底し、刈取りの 5～7 日前までは間断かん水を行う。

#### <水管理のイメージ>



### (2) 肥培管理

- ・ 肥効調節型基肥栽培では、原則、追加穂肥は施用しない。  
ただし、幼穂形成期の 14 日後の SPAD 値が 32 (群落葉色 4.2) 未満の場合は、出穂 3 日前までに窒素成分で 1.0kg/10a 程度の追加穂肥を行う。
- ・ 分施肥栽培では、穂肥は生育量 (表 2) に応じて、表 3 を目安に 1 回目を幼穂形成期の 7 日後頃、2 回目を 1 回目の 7 日後に施用する。

表 2 幼穂形成期の生育の目安

草丈 (cm)	m <sup>2</sup> 茎数 (本/m <sup>2</sup> )	SPAD	群落葉色	生育量	
				SPAD	群落葉色
62	580	35	4.0	125	140

注) 生育量 SPAD : 草丈×茎数×SPAD÷10,000

群落葉色 : 草丈×茎数×群落葉色÷1,000

表 3 穂肥施用量の目安

幼穂形成期 の生育量	N施肥量 (kg/10a)	
	1回目	2回目
適正	0.75～1.0	1.5
過剰	0	1.5

### (3) 病虫害防除

- ・ 病虫害防除は「コシヒカリ」に準じて実施する。特に、「富富富」の「いもち病抵抗性」を持続させるため、穂いもち防除 (穂揃期) を確実に実施する。
- ・ 生育期間を通しての化学合成農薬の成分使用回数が 12 以内となるよう留意する。